流れの先に

筑後のい草

～心和ませるこだわりの逸品～

主に畳表の材料として使われる“い草”は、その生産がピークとなる昭和47年には、収穫量が全国で13万トンにのぼり、11,800haもの水田に作付けされていました。福岡県はその当時、収穫量2万3千トン、作付面積2,000haを誇る全国有数の生産地でした。その後、住居空間の洋風化による需要の減少や中国からの安価な製品の輸入増大、さらには化学表と呼ばれる化学繊維を用いた製品の増加等により、国内でのい草の生産は年々減少しています。平成27年産の福岡県での生産は、収穫量165トン、作付面積14haとピーク時の1/100以下に落ち込み、生産農家は、わずか14戸となっています。

今回は、福岡県三潴（みづま）郡大木町を訪ね、い草の生産を続ける山浦義人さんにお話しを伺いました。

作り続けて 50 年

まもなく師走になろうかという頃、取材先である山浦さんの水田に向かうと既に苗の植え付けが終わっていました。い草は、稲作のように種籾（たねもみ）から発芽させて苗を作るのではなく、収穫前のい草の一部を元苗とし、分けつにより翌年の苗を育てます。苗は、寒くなる11月頃に水田に植え付けられ、5月頃に40cmほどの高さに刈り揃えられたあと、７月頃に刈り取りを迎えます。生産時期の違いを利用し、かつては、稲作の裏作としても生産されていました。

山浦さんがい草作りを始められたのは、い草の生産量がピークを迎える直前の昭和40年のことです。「当時は、生産量こそ多いものの、筑後の畳は粗悪品が多いと言われていました。質が良いと言われていた備後産に負けないよう、日本一の畳を目指して頑張りました。」と山浦さん。50年間作り続けるい草へのこだわりを聞いてみました。

植えられる直前の苗床

刈り取り作業

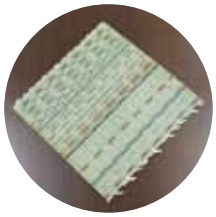
【土と水へのこだわり】

山浦さんは日本一のい草作りのため、良い土作りと水の管理にこだわられています。「これまで、雑木林の腐葉土や菜種、肉や魚など様々なものを元に有機肥料作りを独自に研究してきました。微生物がきちんと働いてくれる“生きた土”を作ることで、い草が持っている自然の力を発揮することが出来ます。微生物の働きで、肥料を撒いて1週間で土が真っ白になることもあります。」また、「水は全ての生命の源です。この辺りも、筑後川下流用水が出来て、水を安定して使えるようになりました。一方、排水事業も進み大水が出ることもほとんど無くなったことで、昔のように水に悩まされることは少なくなりました。」

良い土作りと水の管理には重要な関係があるといいます。「例えば、有機肥料の腐敗を押さえるため、一般的ない草作りよりも水は少なめに調節しています。また、水中の溶存酸素量を増やすことで微生物のはたらきが活発になることから、マイクロバブルの注入も行っています。」

い草の良さを伝えたい

こだわりのい草作りも、需要の低迷により昔は２haで行っていた作付けを0.8haに減らしているといいます。い草の良さを一人でも多くの人に知ってもらうためにはＰＲが必要と考えられている山浦さんは、ご自宅にい草の加工体験施設を併設されています。「12月は、毎日のように注連飾り作りの教室を開いています。他の時期もコースター作り体験や畳表の生産工程を見学していただいています。い草に触れてもらえれば、その良さが分かってもらえると思います。来られた方は、皆さん元気になって帰られますよ。」



注連飾りとコースター

畳表を作る様子

愛を込めてい草を育てておられる山浦さんは、「い草製品は、先人たちの知恵であり、安らぎとエネルギーを与えてくれます。確かに、昔に比べれば需要は減りましたし、機械や資材にかかる費用を考えると生産を続けるのは厳しいです。それでも、良さを分かって買って下さる方がいる限りい草作りは続けていきたいですね。それに、自然の持つ力を活かしたい草作りは、楽しいですからね。」と笑顔で教えてくださいました。

取材帰りに頂いたこだわりのい草の敷物とコースターからは、今でも心和ませる香りが漂い、リラックスさせてくれています。

ご夫婦でい草作りを続けられている山浦さん